

# 社会福祉実践理論考 (I)

— アン・サリバンの教育実践から —

齋藤 征人<sup>1</sup>・住友 雄資<sup>2</sup>

(平成13年10月5日受付, 平成13年11月29日受理)

A Consideration of Practical Theories on Social Work  
from Educational Practices of Annie Sullivan

Masato SAITO<sup>1</sup>, Yuji SUMITOMO<sup>2</sup>

(Received : October 5, 2001. Accepted : November 29, 2001)

## 要 旨

本稿では、実践理論構築の必要性の観点から、実践と理論の「対話」に関する考察ならびに、メアリー・リッチモンドのソーシャルワーク論に大きな示唆を与えた、アン・サリバンの教育実践の記録から、①状況に応じて専門的な枠組み一旦を捨てる（棚上げする）必要があること、②実践のポイントは個人の卓越した部分の発見と解放であるということ、③実践家の「仲介者」としての役割の重要性、の三点をその重要な援助観・人間観として抽出した。リッチモンドはこれらに、自らの実践の省察によって得られた知見を加えながら、ソーシャルワークの体系化・科学化を目指したものと思われる。サリバンの教育実践から示唆を得たリッチモンドのソーシャルワーク論は、現代においてはエンパワーメントないしストレンクス視点といった観点から再考する価値がある。

Key Words : 実践理論 専門家 実践家 臨床的方法 エンパワーメント ストレンクス視点

## はじめに

社会福祉学においては、理論と実践との関係性についての問題が、これまでしばしば取り上げられてきた。ある理科系大学出身者との対話の機会に恵まれたとき、彼は「社会福祉ではどうして理論と実践が乖離し得るのか？ 私たちの分野では、ある理論が実践によって立証されたり、条件が付されたり、修正されたりと、両者が循環することは至極当然で、乖離はありえない」といった内容の指摘をしたのであった。

状況、場、時間などを背景としながら、また何より人間という極めて不確かな存在を対象としている社会福祉は、こうした循環を望みながらも、現実的には少なからざる困難が伴うこともまた否

めない。しかしながら、やはり理論は実践に貢献してこそ理論足り得るのであり、すなわち実践に示唆を与えない理論は、もはや幻想であるとするのは過言であろうか。

こうした問題意識にたって、本稿においては前述の循環を生み出す手がかりとして、まず実践理論構築の意義について、理論と実践の関係との関係性の観点から検討する。次に先人の優れた実践理論の底流にある論理を見出すため、メアリー・リッチモンドの『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』(1922)に大きな示唆を与えた、アン・サリバンの教育実践について再検討を試み、現代社会福祉の理論と実践の方法に、有益な示唆を得たいと考える。

1 北海道医療大学大学院看護福祉学研究所 Graduate School of Nursing and Social Services, Health Sciences University of Hokkaido  
2 高知女子大学社会福祉学部社会福祉学科 Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, Kochi Women's University

## I. 「理論－実践」関係の再考

かつて大塚(1969)は、理論と実践の関係性について興味深い指摘をしている。「理論(方法論も含めて)がただそれ自体としてだけ研究されるということは、いわば石女におわる可能性をつよくはらんでいる。むしろ、理論研究は、直接にしろ間接にしろ、なんらかの実証的研究を交え、いわば実証の一部分をいう形をとっている場合にのみ意味をもちうる」<sup>1)</sup>と。既成の理論体系を整理することのみに腐心して、あるいは常識的実感から脱却せずして、理論との結びつきを拒むような実践であってはならないのである。そのためには理論が万能ではないこと、実践は言わば「木を見て森を見ない」類の過ちを犯しがちであることを自覚しておく必要がある<sup>2)</sup>。

こうした問題については、社会福祉の分野であっても従前より多くの指摘があるが<sup>3)</sup>、その内容の多くは大塚の見解とほぼ一致している。現在に至っても社会福祉の多くの研究者の指摘は次のように約言できよう。すなわち、理論家は、理論が活用されるために系統化された理論体系それ自体のみならず、その理論が形成される過程にまで遡及し、理論の前提となっている視点や意義についての理解が必要であると。また、実践家は、学会・研究会等における発表・報告は個別的な状況のどこに、他の実践家の活動に寄与するのかを意識せよと。つまり、特殊性を普遍性にまで整理・止揚すべきであると言うのである。

しかしながら、より現実的には、一人の人間がその双方—すなわち普遍性のレベルと具体性のレベルとの間—を、観念的に行き来することは必ずしも容易ではない。30年以上にわたる理論と実践との乖離問題に関するこれまでの諸見解は、それを両者に求めることのみにとどまってきたように思われる。このことが、一連の議論の浅薄さと、30年以上こうした議論が続いているという不名誉な連続性を助長してきたのではないだろうか。この際、たとえこうした議論の内容が正論であっても、果たして現実的な方法なのかどうかを再考

することが必要であろう。

例えば「走り続けなければならない」実践家にとって、日々生起する事実を論理的に記録化し、研究素材としての価値ある体裁・水準にまで高めることは容易なことではない。ましてや一般性・普遍性のレベルにまで止揚することを実践家のみ求めることが、能力の如何にかかわらず、果たして現実的かどうかということである。

従来から、両者の「協業」の必要性を指摘する声はあるが、それらの多くは、理論家はその立場を超えることなく理論家として事実立会い、分析・解釈を加えること、あるいはまた、実践家はその立場を超えることなく理論の不備を指摘することをもってそれとしてきた感を否めず、必ずしも建設的であったとは言い難い。だからこそ理論家は、実践家とともに実践の理論的裏づけ、理論の妥当性の検証・評価等を行うべきであり、こうした一連の作業は分担や観念的な「協業」では成功しないだろう。両者が共同の時間と空間において、互いの論理の突合せと、いわば「翻訳」的作業を行い、その成果の共有化を図ることが重要である。またこのことが、複雑で多岐にわたる現実耐え得る理論と実践力を、互いに醸成することになるのではないか。

このような点から、共同の時間・空間において「翻訳」的作業から生まれた一般論(いわゆる実践理論)が、理論と実践の言わば中間的位置付けとして、その価値が見出されるのである(図1)<sup>4)</sup>。

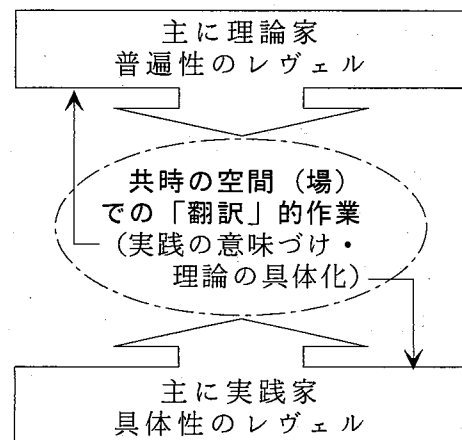


図1 理論と実践の「翻訳」的作業

## II. サリバンの教育実践

本格的なソーシャルワークの科学化・体系化を試みたのがメアリー・リッチモンドであることはよく知られている。これまで、およそ80年にわたるソーシャルワークの理論史上においては、様々な専門分化とモデリングが試みられてきた<sup>5)</sup>。そのいずれもが、援助の対象となる当事者への適切で合理的な援助技術の開発を追求してきた。しかし同時に、それら技術を用いるソーシャルワーカーの人間観から表出するであろう基本的立場・態度・視点が問われることも避けられない。

本章においては、通俗的にはいわゆる診断主義の代表格として位置づけられてきたメアリー・リッチモンドが、自身のソーシャルワーク論を体系化・科学化する過程において大きな影響を与えたアン・サリバン<sup>6)</sup>の教育実践を検討しながら、リッチモンドが得たであろうソーシャルワーク実践に有益な示唆を考察したい。

現在も伝えられているサリバンの教育実践は、日々の試行錯誤とその記録化・一般化のくりかえし、実践と理論との往復運動であった。そうした実践を、のちにリッチモンドがソーシャルワーク論構築のため、意味づけと対話を試みたことから、リッチモンドのソーシャルワーク論それ自体、優れた実践理論の先駆けといえるだろう。より現実的な科学を生み出そうとしていたリッチモンドが、隣接する教育学からヒントを得ようと試みたのは、当然の帰結かもしれない。全盲・聾啞だったヘレン・ケラーを、授業（指導）をはじめた1887年3月6日からおよそ1ヶ月でキスするほどの信頼関係を構築するまで至ったサリバンの、人間観は如何なるものであったのか。リッチモンドの着目点をもとに検討してみたい（以下、「ケラー（女史）」「サリヴァン（女史）」とあるが、いずれも既述の「ヘレン・ケラー」「アン・サリバン」と同一人物である）。

### 1. 慣例を無視するということ

「ケラー女史が生来、偉大な天賦の資質の持ち主

であったことは明らかであるが、しかし、ケラー女史自身いつも、自分の教育を社会的なものにまで高めたサリヴァン女史の能力と、それまでの慣例を無視して、生活そのものを最良の説明者として活用したサリヴァン女史の天性が、まれにみる幸福な人生とまことに悲惨な一生との相違をもたらした」<sup>7)</sup>（傍線、引用者）

このことについて、サリバンも次のように説明している。以下は、ケラーへの教育を始めてから35日目（1987年4月10日）、親友に宛てた手紙の一部である（結果として、こうした私記録が、当時の日々の実践を知る重要な証言者となったことも付言しておきたい）。

「私は、今のところヘレンには規則正しい授業をしないようにしています。ちょうど二歳の子どもを扱うように彼女を扱っています。子どもがまだ役に立つ用語を習得していない時期に、勉強の時間や場所を決めたり、また決められた課題を学習するように強いることはまちがいだということについて最近気づきました」<sup>8)</sup>（傍線、引用者）

専門的な援助関係の場面を思い起こしてみると、ある専門家がクライアントと関わる時、一定の目的達成のために、計画や働きかけ、実践、評価等、すなわち合目的的にプログラムを実施しようとしてきた。またそれがソーシャルワークの専門的援助プロセスとされてきた。しかし、このことを私たちも経験する日常の人間関係の場面に置換してみたい。ある友人との日常的な関わりを考えると、悩みを互いに打ち明けられる関係性に至るまでには相当の時間を要するはずである。ましてや関係性ができていないところで合理的な関わり、援助などであろうはずがない。にもかかわらず「援助関係」の場面になると、途端に専門家は、数度しか会ったことのないクライアントが悩みや問題を打ち明けない（より正確には、打ち明けられない）とき、「頑固な利用者」という印象を持つものである。これは援助者側に「クライアントはかくあるべし」といった枠組みが存在していることを意味している。

しかし、逆に本来の目的とは異なる日常のふとした言動によって、クライアントとの関係性が発生し、これが合目的な援助行為や介入を要する際に、大きな助けになることがある。例えば、教員と学生との関係において、講義は系統的・合理的にやっているのだからと、休み時間は講義に関係ない質問は受けないといった固定的な対応を教員がしたとすれば、学生は肝心なときに心を開かないだろう。むしろ講義、それ以外などの時間の枠組みを問わず、学生との単なるたわいもない会話から生まれた小さな関係性が、講義への関心と動機を高めることがある。つまり自らの立場性や枠組みを一方的に前面に出すのではなく、一旦棚上げし、そこにある状況をそのまま受けとめることが重要である。

佐藤(1994)は「対象者のことをわかろうとして、(援助者の)枠組みから自然に自由になっているときに、より相手の気持ちを理解することができる。もちろん、同時に援助者のほうの気持ちも自由なものになっていく。必要なときには「枠組みを捨てて」、相手の気持ちをそのままわかることが、援助の場ではより求められる。捨てることは勇気がある。また身につけたことを完全に捨てることはできないし、たとえ捨てられても、またできたことが一つの枠組みになっていくのである。要は、捨てたり身につけたりしていくなかで、単に教科書どおりに援助するのではなく、自分の気持ちを援助するなかで正直に出しながら、その気持ちに適切に気づいていくことが大切なのである。「よかった」というケアには、必ずこの気持ちの相互の動きと受けとめあいがある」<sup>9)</sup>(括弧内ならびに傍線、引用者)という。すなわち、専門家の意識に内在している専門性、慣例、論理、枠組み、ものの見方・考え方等それら一切を、状況によっては一旦棚上げし、そこにある現実そのものを受け入れるということである。このことは、現代においては社会福祉学における「臨床的方法」と位置づけることができる<sup>10)</sup>。

また「慣例を無視する」と聞くと、かなりラディ

カルなイメージをもつが、既存の枠組みにとらわれず、より現実的で効果的な方法を、適時適切に、というメッセージとして捉えることができれば、的を射た主張といえるだろう。

## 2. 特質を見抜き、解放するということ

「この非凡な教師は、あらゆる実在の中で最高のもの—パーソナリティという実在に対して真の直観力をもっていた。サリヴァン女史は、ヘレン・ケラーの障害とその障害をもたらす不幸な結果すべての下に潜められていたケラーの並はずれた特質を見抜くことができた。サリヴァン女史はこの発見を基礎にして、われわれが今日ヘレン・ケラーの名をあげて課題にするあの高度に社会化されたパーソナリティを、まず初めに解放し、さらに発達させるために環境資源を次々に動員した」<sup>11)</sup>

サリバンはこのことについて、教育を始めておよそ2ヶ月後(1987年5月8日)、親友に宛てた手紙に次のように記している。

「私はこのごろ、念入りに作りあげられた特殊な教育方法にすべて疑問を抱きはじめています。私にはそれらの方法が、子どもは考えることを教えなければならぬ、無知なる者だという仮説のうえにたてられているように思えるのです。ところが、子どもは好きなようにさせておくと、たとえ目立たなくても、より多く、より良く考えるものです。やさしい声の先生が、積み木で石垣をこしらえたり、細い色紙で虹を作ったり、ビーズの花ビンに藁の木を植えるように子どもに言ったりしながら家の中で丸い小さな机に向かわせる代わりに、子どもを自由に行ったり来たりさせたり、実物にふれさせたり、自分で感じたことをまとめたりさせるべきです。なぜなら、そのような先生の教え方だと、子どもは生き生きとした経験から自由な考えを養う前に、除かなければならぬ不自然な連想で頭をいっぱいにしてしまうのです」<sup>12)</sup>

このことは現代の、ソーシャルワーク論におけるエンパワーメントの視点に酷似している。

エンパワーメントとは、この20年ほどの間に普

及してきたソーシャルワークの新しい概念である。狭間 (2000) は、「ストレングス視点は、援助者がクライアントの病理／欠陥に焦点をあてるのではなく、ストレングス—上手さ、豊かさ、強さ、たくましさ、資源—に焦点を当てることを強調する。それは、援助者の援助観、人間観に転換を迫るものであると同時に、治療中心の実践過程を、「支える」ということ、またエンパワーメントを目的とした実践に転換させる視点でもある」<sup>13)</sup>として、援助者の従来型援助観・人間観の変革として位置づけている。また久保 (1999) は、エンパワーメントを志向したソーシャルワーク実践の大きな意義として「クライアントの病理や欠陥を強調するのではなく、人々が自分で選択し決定する力を持っている、困難な生活状況を解決するための潜在性を持っているという信念に基づき、クライアントの強さに着目し、クライアントが自らの生活の支配権を獲得するのを援助し、かつ社会問題への認識を深め、社会正義（不平等なパワー関係の修正）を促進することにある」<sup>14)</sup>としている。

すなわち、リッチモンドは、サリバンがケラーの本来もっている力を信じ、それを最大限生かすために、その発揮を阻害しているものを取り除き、関心を示したものには意味を与えていくといった、言わばエンパワーメント的实践を試みていることに、大きな示唆を得たものと思われる。

医療や看護のように、目に見える技術をもたないソーシャルワーク実践が目指すものは、医療や看護、介護の専門家ではなく「利用者の専門家」でしかないのではないだろうか。もしそうならば、クライアントの短所や欠陥をいくら集め、評価しても、そこから浮かび上がるものはゆがんだ人間像でしかない。目指すべきは、クライアントの思いを順序だてて代弁すること、またクライアントのできること（言わば「得意科目」）に注目し、それを伸ばすための「作戦」をクライアントとの共同で練ることである。具体的には、潜在的可能性の発見と、発揮できる環境への整備、挑戦への促し等ということになる。そのためには、まず

クライアントにとっての真実（リアリティ）<sup>15)</sup>と向き合い、対話を始めるべきではないだろうか。

### 3. 助力を仰ぐということ

「サリヴァン女史は、もう1つ際立った直感的なソーシャル・ワーク感覚によって、自分の知識を補うものであればいかなる複数の専門知識であれ、それをもっている者に進んで助力を仰ぐとした」<sup>16)</sup>

確かにサリバンは、ケラーへの教育を始めてから1年ほど経った頃には、聾者の教育に詳しい数人のドクターにアドバイスを受たり、ケラーを牧師に引き合わせるなど、自らの力の及ばないことについては、その時々状況に応じて多方面に助力を求めている。優れた援助者は、その責任感からか、しばしばすべての援助行為を独力で担おうとするが、こうした自己完結的な援助行為は、視野が狭くなりがちで、クライアントの可能性を陳腐なものに抑制してしまうことがある。独力で抱え込むことは、身体的・精神的リスクを伴うことから、リスク分散の観点からも望ましくないことは言うまでもないだろう。

谷中 (1996) はかつて、精神病院から退院してきた精神障害者の地域生活支援を考える上で、「ステップ式はとらない」<sup>17)</sup>ということに気づいたという。すなわち、精神病院から退院し地域での生活を始めるにあたり、さしあたって心配されることは、自炊、金銭管理、近所づきあい、コミュニケーション等であるが、「それらすべてをクリアしたら一人前」という立場はとらないということである。例えば自炊ができないならば、近隣の授産寮や作業所、コンビニエンスストアで食事を購入すればよいし、金銭管理や買い物については、同じ病気で一足早く地域で暮らし始めた「先輩」たちが支援してくれる。また、当分はこういった仲間の支えによって、近所づきあいやコミュニケーションはあまり問題にならないという。言わば「不得意科目」をステップ式にリハビリテーションするのではなく、足りないものはあらゆるサー

ビス、社会資源を活用して補えば良いという立場である。

すべての援助をある固定的された役割の中で完結させねばならないのではなく、必要な資源をつなぎ、コーディネートする役割を、ソーシャルワーカーは担うべきではないだろうか。リッチモンドがこうした役割を「社会的な電話交換手のようなもの」<sup>18)</sup>と例えている点も興味深い。

### Ⅲ. エンパワーメントの観点から

これまでの検討から、サリバンの教育実践から得られるソーシャルワークの基本的援助観・人間観として、以下の三点が約言できるものと思われる。

- ① 状況に応じて専門的な枠組み一旦を捨てる（棚上げする）必要がある。
  - ② 実践のポイントは個人の卓越した部分の発見と解放であるということ。
  - ③ 実践家の「仲介者」としての役割の重要性。
- このように見てくると、リッチモンドの主張を、いわゆる診断主義の特徴である、精神分析的意味合いよりも、むしろエンパワーメントを想定した内容として光を当てなおすことができる。むしろこれは、クライアントの「強さ」に着目するストレングス視点とも軌を一にするものである<sup>19)</sup>。

サリバンとケラーは、日々反省的な実践の中から試行錯誤的学習によって互いに成長し、またともに夢や希望を獲得していく関係であり、教師と生徒でありながら、まさにパートナーと呼ぶに相応しい。そしてこうした関係性の中で与えられた直接・間接の援助が、結果として本来もっている潜在力を存分に発揮するための環境を整えることに貢献したのである。つまり、サリバンの教育実践はエンパワーメントの実践であったとも意味づけられるのであり、ここにリッチモンドが自らの実践理論であるソーシャルワーク論構築に際し、サリバンの実践に注目した理由、またこうした実践の理論の絶えざる対話によって生まれたソーシャルワーク論が現代にも多くの示唆と再考をチャン

ス与えうる、その理由と価値が看取できるのである。

本稿執筆にあたっては、筆者らが所属する北海道医療大学大学院看護福祉学研究科の谷中ゼミナールにおける議論が、問題意識の発端となっている。谷中輝雄教授とゼミの学兄らに、ここに記して感謝したい。(2001/10/05)

- 1) 大塚久雄『大塚久雄著作集第九巻 社会科学の方法』岩波書店、1969、p.89.
- 2) 阿部志郎編『地域福祉の思想と実践』海声社、1986、p.51.
- 3) とりわけ1970~80年代にかけての『社会福祉学』、『社会福祉研究』誌上では、高沢武司、岡田藤太郎、後藤平吉らによる議論が活発であるが、そのほとんどは現代に連続する内容であり、すなわち議論の内容が30年前から進展していないことを示すに十分である。
- 4) 太田義弘は、「今日の複雑・錯綜した問題に効果的な対応が求められている」こと、「専門・分化し発達してきた諸科学が、独立して有効に目的を達成することへの限界から、統合化の推進や、統合科学としての有効な理念や目的、方法をもつことによって、時代の要請に応えようとしている」ことをあげ、実践理論の必要性と、その一つとして自らの主張する概念である「ジェネラル・ソーシャルワーク」という概念とアプローチを提唱している（太田『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規、1999、p.29）。
- 5) ソーシャルワークの実践モデルは、現在およそ30近く存在するという説もある（山崎美貴子・北川清一編『社会福祉援助活動』岩崎学術出版社、1998、p.76）。
- 6) アン・サリバン（Annie Sullivan）は、全盲・聾啞のヘレン・ケラー（Helen Keller）の家庭教師としてあまりにも有名である。今日では、以下の文献によって知ることができる。

- ・ヘレン・ケラー (岩崎武夫訳) 『わたしの生涯』  
角川書店, 1966.
- ・ヘレン・ケラー (川西進訳) 『ヘレン・ケラー自  
伝』ぶどう社, 1982.
- ・サリバン (楨恭子訳) 『ヘレン・ケラーはどう教  
育されたか—サリバン先生の記録—』明治図書出  
版, 1973.
- 7) リッチモンド (小松源助訳) 『ソーシャル・ケー  
ス・ワークとは何か』中央法規出版, 1991, p.9.
- 8) サリバン (楨恭子訳) 『ヘレン・ケラーはどう教  
育されたか—サリバン先生の記録—』明治図書出版,  
1973, p.33.
- 9) 佐藤俊一「ケアする人の満足—自分の気持ちが実  
感できる援助とは」, 岸良範・佐藤俊一・平野かよ  
子『ケアへの出発—援助の中で自分が見える—』医  
学書院, 1994, p.63.
- 10) 「臨床的方法」とは, ある現象ないし事実に潜ん  
でいる論理を真実として認定し, そこから援助をは  
じめようとする視点に立ち, 受苦者とともに悲しみ,  
悩むといった「ともにいる」立場で現実から学び,  
そこから得られた知見を次の実践や理論へと生かす  
といった循環的方法である。近年「臨床哲学」「臨  
床教育学」「臨床社会学」等の臨床論が登場してお  
り, 本稿筆者 (齋藤) も臨床福祉学を構想している  
一人である。
- 11) 前掲7), p.13.
- 12) 前掲8), p.37.
- 13) 狭間香代子「自己決定とストレングス視点」『社  
会福祉学』40, 2.
- 14) 久保美紀「ソーシャルワークにおけるエンパワ  
メントのもつ人間観—クライアントの主体性をめぐ  
って—」, 秋山智久・高田真治編『社会福祉の思想と  
人間観』ミネルヴァ書房, p.146.
- 15) 例えば, 精神障害をもつクライアントが幻覚を見  
たとすれば, それはクライアントにとってはそのと  
き体験した「真実 (リアリティ)」である。援助者  
が, それを「幻覚」であると説明し, 意味づけるこ  
とは, クライアントには意味をなさない。  
客観的な事実としての幻覚であるという判断は,  
一旦棚上げし, クライアントが何かを見たという事  
実をそのまま受けとめることが重要である。
- 16) 前掲7), p.14.
- 17) 谷中輝雄『生活支援—精神障害者生活支援の理念  
と方法—』やどかり出版, 1996, p.166.
- 18) 前掲7), p.65.
- 19) 小松源助は, ストレングス視点の先駆者として,  
リッチモンドをあげている (小松「ソーシャルワー  
ク実践におけるストレングス視点の特質とその課題」  
『ソーシャルワーク研究』22, 1)。